

○執筆者一覧○

|       |                     |                |
|-------|---------------------|----------------|
| 安生 恭子 | ANJŌ Yasuko         | (大阪府立大学)       |
| 岩本 篤子 | IWAMOTO Atsuko      | (大阪市立大学非常勤講師)  |
| 小倉 博史 | OGURA Hiroshi       | (京都外国語大学)      |
| 小栗栖 等 | OGURISU Hitoshi     | (大阪市立大学後期博士課程) |
| 川口 陽子 | KAWAGUCHI Yōko      | (神戸大学博士課程)     |
| 傳田久仁子 | DENDA Kuniko        | (大阪市立大学後期博士課程) |
| 土井 隆広 | DOI Takahiro        | (関西学院大学非常勤講師)  |
| 福島 祥行 | FUKUSHIMA Yoshiyuki | (和歌山大学非常勤講師)   |
| 舟杉 真一 | FUNASUGI Shin'ichi  | (京都外国語大学)      |
| 森本 英夫 | MORIMOTO Hidéo      | (大阪市立大学)       |

T.L.L.M.F. 第3号

発行 ————— 1992年6月1日

発行所 ————— 大阪市立大学文学研究科  
森本研究室

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138

[06-605-2455]

印刷 ————— アルプス印刷

[06-691-0558]

# Travaux de Linguistique et Littérature Médiévale Françaises

## 目次

- 1 : Yoko KAWAGUCHI ● Cahier d'étude comparative entre *Guigemar* et *Guingamor* II — Sur les amies des héros
- 7 : 小栗栖 等 ● 武勲詩に関する諸研究  
——その1 Jean Rychner: 『武勲詩』——
- 15 : 傳田久仁子 ● 『MELUSINE物語』における空間構造  
——1. 「煉獄」としてのリュジニャン城
- 23 : 福島 祥行 ● 受動文と動作主体の認識構造
- 32 : 土井 隆広 ● "on"の使用と情意の発現
- 38 : 安生 恭子 ● APPORTER/EMPORTERの意味分析試論
- 44 : 舟杉 真一 ● 語尾が -ment で終わる副詞について
- 50 : 岩本 篤子 ● 古フランス語における接続詞 COM(E) と QUE に関する一考察
- 56 : 小倉 博史 ● 固有名詞による成句について (3)  
——国籍、地方、言語より——
- 63 : 森本 英夫 ● フランス語冠詞の史的考察 (1)  
——Syluius から Robert Estienne へ——

# 武勲詩に関する諸研究

—その1 Jean Rychner:『武勲詩』—

小栗栖 等

## I. 本稿の対象と目的

本稿はJean Rychnerの『武勲詩——ジョングルールの叙事詩技法についての試論——』(La Chanson de Geste — Essai sur l'art épique des jongleurs, Droz et Giard, Genève et Lille, 1955)の祖述及び、この試論の問題点と他の研究者に対する影響の概括を目的としている。四十年近くも以前に発刊されたこの論文を今になって問題視する主な理由は三つある。

- 1) 武勲詩が「歌われた詩」であるという仮説に基づいて、中世「文学」の「他者性<altérité>」<sup>(1)</sup>に最初に注目した論文の一つであること。
- 2) その「記述的研究<l'étude descriptive>」<sup>(2)</sup>が、現在の武勲詩研究にも様々の影響を及ぼしていること。
- 3) 更に、その「記述的研究」が、尚も展開の余地を持ち得ること。

それ故、本稿の考察は上の視座において行われることとなる<sup>(3)</sup>。但し、考察の順序に関しては『武勲詩』の目次を尊重することとする。

## II. 『武勲詩』

序説:AVANT-PROPOS (pp.7-8)

武勲詩の起源を問う前に、武勲詩そのものの本質を捉えねばならないという観点から、「この試論は記述的かつ総括的たらんとする(p.7)」、つまり、武勲詩ジャンルに普遍的な特性の形式的考察が本試論の目的となる。考察の直截の対象となるのは『ロランの歌』以下九つの作品である<sup>(4)</sup>。選択が幾分恣意的で、その幅が狭隘であるという批判があるにせよ、本試論は様々の修正を施されつつ一層の敷衍を行われ得るような、第一の基盤を造りだすことを目的としている。

### 第一章 武勲詩の伝播:LA DIFFUSION DE LA CHANSON DE GESTE(pp.9-25)

「文学の諸ジャンルは何らかの伝播<diffusion>の条件に、大きく左右されるが、その条件は文学史と同程度に社会史にも属している。」(p.9)

つまり、一般に、受け手に如何にして伝えられるかによって、作品の形式が決定されるということが、本試論の大前提となる<sup>(5)</sup>。個別的には、武勲詩はジョングル

ールによって伝播されていたということが前提となる。その根拠は、ジョングルールが聴衆に語りかける様子を物語っていると思われる、武勲詩の諸作品の幾つかに見られるプロローグである。そこで、「歌い手」たるジョングルール、歌われる状況たる「音楽」、歌われる内容の創出者たる「作者」について、Ed. Faralの『中世フランスにおけるジョングルール達』に依拠して、武勲詩の伝播状況を考察するならば、「市から領主の館に至るまで」、「娯楽のプロフェッショナルたる」ジョングルールによって、「ヴィエル伴奏を伴って、歌われ」、時に創出される、「縁日の出し物であると同時に一つの産業の生産物でもある」ような、「《条件》によってこの上なく縛られた<sup>(6)</sup>」武勲詩の姿が明らかになる。このことは、外ならぬ武勲詩の諸作品のジョングルールへの言及、更には現存するセルビアの叙事詩の伝播状況に関するMathias Murkoの研究によっても裏付けられるのである<sup>(7)</sup>。

## 第二章 写本の中の武勲詩: LA CHANSON DE GESTE DANS LES MANUSCRITS (pp. 26-36)

考察の対象となる武勲詩作品、九作品の内の五作品は唯一の写本のみが現在に伝えられているのであるが、その写本の体裁は極めて「慎ましやかな」ものであり、ジョングールの備忘録という印象が強いのに対し、残りの四作品は「系列写本<manuscrit cyclique>」という複数の作品を物語内容の年代順に一つの系<cycle>に纏め挙げた豪華な写本で伝えられている<sup>(8)</sup>。ところで、前五作品の内四作品はアングロ＝ノルマン語で書かれており、古態は周縁地域に残るという言語地理学の考え方に従うならば、これらの写本が武勲詩の古態を比較的良く残しているものと目されるのに対し、後四作品は書籍商或いは蒐集家の所産であると推測される。それ故、武勲詩本来のあり方に関して言えば、「書物、つまり物体としての書物は、この文学においては、重要な役割を果たさなかったように思われる」(p. 29)のである。

現在武勲詩は写本でその存在を知られる為に、「完結した改変不可能の作品」であると見做されがちであるが、それは事実から程遠い。というのも、「系列写本」で伝えられる作品においてさえも、その形式と内容に流動的な性格を見て取ることができるからである。唯一の写本で伝わる武勲詩の流動性の甚だしさは『ロラン』を見れば明らかである。結局のところ、武勲詩のこうした流動性は、Bédierの主張するような作者の「知的所有権」の独占にもまして、口承という伝播条件の所産である。そのことは現存する叙事詩の歌い手たちが互いに敵愾心を抱き、更に自らの裁量で叙事詩を拡大したり、縮小したりするという事実によっても裏づけられる。そこから以下のような帰結が導き出される(p. 36)。

「武勲詩の写本は証人であり、《作品の外部で》作品の存在を立証し、その一側面を固定しているのだと言えよう。そういうことであれば、諸写本がかくも多くの異本を、そして重大な異本を提示していることや、武勲詩の批評の間

題が、本来的に文字<écriture>によって書かれ、伝播される作品に対するのと同じ地平の内部で提起されてはならないのだということが理解される。』<sup>(9)</sup>

### 第三章 物語の構成: LA COMPOSITION DES RECITS (pp. 37-67)

考察の対象となる諸作品は武勲詩全体の中では、比較的短い部類に属する。作品の長さや構成の統一性=単一性<unité>は、無関係ではないにせよ、短かければ統一性があるというわけでもない。そこで、主題の単一性<unité du sujet>と内的一貫性<cohésion>の観点から考察を行うならば、件の九作品は、主題の単一性を有するものと、そうでないもの、つまりは複数の挿話を持つもの<chanson à épisodes>に分類される<sup>10)</sup>。前者に関しても、主題の単一性には度合いがあり、物語の構成が緊密さを欠くに従って、詩は劇から劇的な歴史へ、つまりは劇的な詩から叙述的な年代記に変容するように思われる。一方、後者に関しても、構成の緊密さの度合いには差があるが、総体的に、エピソードがその数に関しても、順序に関しても必然性<nécessité><sup>11)</sup>を考慮せずに決定されており、全体からの観点なしに構成されていると考えられる。畢竟、武勲詩は全体的に言えば、その構成は、比較的緊密さを欠くものだということができる。主題の単一と一貫性の点で、例外的である『ロラン』にしても「バリガン」という瑕瑾が見出されるのである。そして、こうした武勲詩の特徴もまた武勲詩の伝播条件に回付され得る(p. 47)。

「……ジョングルール達は、聴衆たちと同様、全体的把握が不可能であるような作品の、色調の統一性、文体、叙述の一貫性などといったものを気遣いはしなかった……驚くべきであるのは『ロラン』の強靱な一貫性の方である。」

それでは、武勲詩の構成に興業の痕跡を見出すことができないであろうか。ユーゴスラヴィアに現存する口承叙事詩の研究によって、一時間当たりの上演詩行数は千行前後と、また、中世の作品の記載から、ジョングルール興業の時間は「夕食から日暮れまで」と推測される。ところで、『輜重』や『修道院』『ラウル』には新しい上演の痕跡が千行強毎に見出される。だとすれば、そうした千行余りという構成単位の長さには「文学的な存在理由」を見出すのは間違いであり、武勲詩のあり方、つまりは伝播の条件にこそその存在理由を求めべきである。

武勲詩に一般的である「回顧<rappel>」と「予告<annonce>」といった技法に関して言うならば、こうした技法が上記のような武勲詩の断片的性格を補うということは確かであるが、その本質は、歌い手と物語と聴衆とを結合して有機的な三位一体を形成するところにある。つまりは、歌い手と聴衆の間に結託関係を作り出すのが上の技法なのであり、武勲詩が伝統的な(聴衆に周知の)主題を扱うことと相まって、その三位一体は他のジャンルに類を見ない程、具体的で、鮮烈かつ直截的なものとなる。つまりは、ここにも武勲詩の伝播条件が見出され得るのである。

#### 第四章 武勲詩の詩節構造: LA STRUCTURE STROPHIQUE DES CHANSONS (pp. 68-125)

本章は専らに武勲詩の詩節=レース<laisse>を扱う。レースは極めて制限の少ない柔軟な形式であり、その限定要素は詩行の音節数とアソナンスの一致だけに限られる。それこそが口承伝播の個別的な条件への適合を可能にするのである。時に、繰り返し部分<refrain>や、導入部・帰結部に相当するような構成がレースに見られるのは、レースが音楽的な実態を持っていたことの証拠であるが、同様の導入詩行、帰結詩行という言語的な構成をもレースは有しているのである<sup>12)</sup>。

#### 第五章 表現様式: LES MOYENS D'EXPRESSION: MOTIFS ET FORMULES (pp. 126-153)

武勲詩は四つのレベルで捉えることができる。即ち、主題と主題を構成する諸テーマ(thème)、更にテーマを構成する諸モチーフ(motif)、そしてモチーフを構成するフォルミュール(formule)である。ところで、本試論は形式の平面上に留まらねばならない以上、考察の対象となるのは後二者だけである。

モチーフとは「兵士の動員」「武装」「武具や軍馬の由来譚」「槍を用いた一騎打ち」「乱戦状態の俯瞰」「戦闘中のかけ声や挑発の言葉」といった、固定した物語の切片であり、こうした切片を多様に結び付けることで、例えば「戦闘」というテーマが多様に構成される。一方、フォルミュールは一定のモチーフを表す為に、詩行単位、或いは半詩句<hemistiche>単位で用いられる固定した表現法であるが、殊に上半句はアソナンスの影響を受けにくいので、その使用頻度が高いと推測される。ところで、フォルミュールに引きづられて、狭い主塔の階段での戦闘で槍を用い、あまつさえ幟を挙げてしまうギヨームの例(『陥落』)や、「槍を用いた一騎打ち」で用いられる表現が、作品間である程度共通していることなどは、こうした表現様式が伝承的に固定したものであったことを示唆している。

固定した表現様式は、詩の創出と記憶を容易にする。歌い手及び作者は大まかな事件の配列のみにその注意を集中してさえ、武勲詩特有の英雄詩的文体を得ることができるからである。そこに表現様式が伝統化する理由がある。ホメロス研究者としてユーゴスラヴィアに現存する叙事詩にも知悉していたMilman Parryは、歌い手には独自の技法を追求する時間的余裕も意志も欠如おり、聴衆からして慣れ親しんでいるスタイルに忠実に従うよう歌い手に期待しているのだと述べている<sup>13)</sup>。

この観点から検討を加えた場合にも、『ロラン』の例外性が明らかになる。『ロラン』の詩人は、一つのモチーフに一つのレースを配し、他の武勲詩と共通のモチーフを用いつつも独自の要素の導入を行うのである。しかし、『ロラン』も他の最古の武勲詩諸作品と共に、伝統的な表現様式を利用している以上は、他の武勲詩に先行されていたことはほぼ確実であろう。それ故、その特異性は次のような事実を意味している。

「伝統的かつ職業的な様式は、このように劇的・詩的意図に、喜んで利用される。それらの手法は決して作者を支配しはしない。そうではなくて作者の方こそが様式を支配するのだ。」(p.151)

#### 結論:Conclusion(pp.154-169)

##### ○『ロラン』の例外性:非《文学》としての武勲詩ジャンルの非典型的な作品

「確かに『ロラン』を意識的に創出された芸術作品として取り扱うことは許される……しかし、……つまるところ、『ロラン』は非典型的な例であると思われる。そして、『ロラン』の研究が正当化する諸帰結は、叙事詩ジャンル全体に敷衍されるべきではなかろう。叙事詩ジャンル全体は、純粹に《文学的な》ジャンルというわけではないからである」(p.154)<sup>14)</sup>

##### ○武勲詩の本質としての加筆:口承文学としての武勲詩の「他者性」

「就中、現存する諸写本の内に我々が読み取るような、武勲詩の統一性=単一性<unité>を断固として擁護せねばならぬ理由を何一つ我々は見出し得ないであろう(p.154)……武勲詩は我々が頁を開く写本の中にはない。我々がそこで捉え得るのは武勲詩の反映(reflet)に過ぎない(p.155)……奥底に至るまで条件を課された、この芸術の産物に、書かれそして熟考を受けた文学、即ち洗練された文学を批評する際に、我々が用いるような判断基準を適用するべきではない……たとえ、『ロラン』が「バリガン」と共に、《本当の》全体(一時に、唯一の作者によって着想されたという意味である)を形成することはないにしても、「バリガン」は……十分に《本当のもの》である(p.156)」

##### ○記述的研究と歴史:古典古代文学の武勲詩への影響の否認として

「結局の所、武勲詩の記述的研究は、武勲詩の歴史への展望を開くのである……現存するテキストのかなたに、既に十分に特徴付けられた形式上の伝統を仮定させるに至る、表現形式の記述的研究にも同様のことが言える(p.156)」

##### ○例外的な事件としての写本:「沈黙の数世紀」への返答として

「武勲詩にとって書物は本質的なものではない。……宗教詩或いは叙事詩を書き記そうという考えは、後代になってからしか起こり得なかったのだ」(p.157)

##### ○職業的口承文学という概念の提唱:「民衆文学」という概念の精密化として

「我々は残された武勲詩の諸作品の背後に、もっと古い恐らくはもっと短い、多分もっと歴史に近い小詩を仮定する方へ傾く(p.157)……全くの所、口承的性格こそがこの文学の説明の中心に位置する以上は、私はためらいなくParryとともに、民衆文学という用語に代えて、口承文学というもっと明確な、そして客観的な用語を採用し、更にこの文学に特殊な性格を付与する現実的な状況を喚起させる職業的という語を、それにつけ加えることとしよう(p.158)」<sup>15)</sup>

【註】

- 1) Paul Zumthorの用いる意味で、この語を用いる。この用語は、固定した「枠組み」を通じて、一義的かつ「正当」な「作品」解釈を導き出し、その諸帰結を現代文学の正統性・正嫡性に収斂させる従来の中世「文学」の研究のありかたそのものを問題視するものである。詳細については、拙論、「『ロランの歌』と「一貫性」の神話——テクスト巡る諸言説と中世「文学」の他者性」(*Lutèce* N°21、大阪市立大学フランス文学会、1991)を参照されたい。  
Cf. *Parler Du Moyen Age* (P. Zumthor, Minuit, Paris, 1980)
- 2) フッサールの「現象学」が、ブレンターノの「記述心理学」の影響下にあったことは周知の事実である。「現象そのもの」を捉えるということは、解釈しない＝意味を問わないということ、つまりは形式化を必然的に含意する。Rychnerもその意味で、「記述的」という語を用いている。
- 3) あらゆる要約が何らかの視座(perspective)を要することは論をまたない。それ故、第二節に本稿筆者の意見が暗示的に反映されることは避け得ない。例えば、『武勲詩』はその頁数の多くを、諸作品の具体的な考察に割いているが、本稿がするのはせいぜいその事実を指摘するのみである。それは、本稿の関心がRychnerの理論体系にあることを示しているのである。しかしながら、明示的な意見と注釈は全て註に収めた。尚、『武勲詩』への参照及びそれからの引用については、本文中で頁数のみを記することとする。
- 4) Rychnerが考察の対象とする他の武勲詩作品は、『ゴルモンとイザンバル』、『ギヨームの歌』、『シャルルマーニュの巡礼』、『ラウル・ド・カンブレ』、『ルイの戴冠』、『ニームの輜重』、『オランジュの陥落』、『ギヨームの修道院』、である。(以下、下線部のみで略記)
- 5) ここでは、作品の伝播と形式の相関関係が一般的に述べられている。それ故に、伝播という訳語は適切とは言えない。同様の意味でリシュネは、「刊行<édition>」、「適用<application>」という用語も用いている。  
また、作品という語も不適切であることを否認しない。「作品」の概念への異議申し立てこそがRychnerの主張の必然的帰結と言えるからである。Gérard Genetteらの用いる「物語言説<discours narratif>」という用語は、テクストという語のように書かれたものを含意することもなく、この場合、最適の用語だと思われる。しかし、本稿はRychnerの祖術を目的とする以上彼の用語に従うこととする。
- 6) 引用は『武勲詩』pp.17-22  
Cf. *Les Jongleurs en France au Moyen Age* (Edmond Faral, Paris, 1910)  
[Slatkine Reprints, Genève, 1987])  
こうした考察が、結局武勲詩の起源問題を連座させざるをえないことは明らかである。これ以後、形式的考察から引き出される諸帰結は、悉く、「伝承主義的」観点からの解釈を施されることになる。つまり、Rychnerは「記述的研究」の領域をこの時点ですでに逸脱してしまっていることになる。それ故、Rychnerの挙げる武勲詩の特性は、書かれた作品の特性であるという、Gerard Braultの反論が可能になるわけであるが、これは、結局のところ水



かけ論を引き起こしてしまう。Cf. *The Song of Roland*, vol 1, pp.8-9  
(Gerard Brault, Pennsylvania st. univ. pres., 1978)

- 7) ここでRychner が描き出す武勲詩像は、「何ものよりもこの文学は、無私無欲<gratuit>の域から掛け離れているのであり……」という点で、Menéndez-Pidal の描き出す「伝承的な芸術の作品は、最初の大衆的な詩人とあい連続して現れる改作者達に由来するのであり、彼らは、匿名性の意志に基づいて万人に供され、万人の所有に帰する一作品を実現せんと目指すのである」という武勲詩像と対極をなす。しかし、このような匿名性に基づくユートピアはRychner の、「知的所有権」の攻防に躍起になるジョングルール達の姿の現実味の前にはやはり影が薄いように思われる。

Cf. *La Chanson de Roland y el Neotradicionalismo* (1959)

[*La Chanson de Roland et la Tradition Epique des Francs* (Ramón Menéndez-Pidal, 2<sup>o</sup> éd. Traduite de l'espagnol par I.-M. Cluzel, A. et J. Picard, Paris, 1960)] (引用は仏語版p.58)

尚、武勲詩の伴奏音楽についてはRoger Pensomの《*The prosody of the Oxford Roland*》(*Literary Technique in the Chanson de Roland*, Droz, Genève, 1982) が、古仏のトニックの位置と結び付けて興味深い考察を行っている。

- 8) 註4)の後四作品がそれである。尚、『ロランの歌』は写本毎の異同が大きい為、オックスフォードの写本が唯一の写本と見做されている。(Cf. p.28)
- 9) だからといって書記<écriture>の重要性は蔑ろにされるべきではない。それによって、断片的な諸作品に纏まりが与えられた可能性は否定されない。Rychner は『修道院』や『戴冠』が口承詩をそのまま写し取ったものであることを推測する一方で、『ロランの歌』に関してだけは、書記が作品創出に大きな役割を果たしたことをほぼ確実と見ている。このように、書記によって断片的な小品が纏まりを得る例は現存する口承詩にも見られる。だが他方、そうした纏まりは、潜在的にとはいえ、ある意味では既に存在していたともいえるのである。いずれにせよ、我々の研究が写本に大きな貢献を受けていることは疑い得ない。(以上、Rychner に従った補足)
- 10) 本文中では、前者に属するものとして『ロラン』、『ギヨーム』、『陥落』、『ラウル』が、後者に属するものとして『鞞重』、『戴冠』、『修道院』が挙げられ、それぞれの構成が詳細に考察されている。
- 11) このような、一貫性、統一性、必然性の概念の結び付きについては、拙論、「『ロランの歌』と「一貫性」の神話——テクスト巡る諸言説と中世「文学」の他者性」(前掲)を参照されたい。
- 12) 本章で最大の関心が払われるのはレース間関係であり、具体的な作品分析に基づいてこれを四つの類型に分類している。ここでは、詩節形式と物語の分節の一致が大きな主題となっており、ここでもまた『ロラン』の例外的な性格が明らかにされる。しかし、この章の主要部分の要約は断念せざるを得ない。第三章で既に明らかのように、Rychner は物語の技法と詩節に纏わる技法を対立させている。無論そうした方法は有益な面も多いのであるが、反面、用語の示している概念が極めて不釣り合いになってしまう。即ち、嚴

密に定義通りに用いれば、物語の技法という概念の外延は余りに広範で、逆に詩節の技法の外延は狭隘過ぎることになってしまう。しかも、そうした欠点を補うべく導入されている歌〈chant〉と物語〈récit〉の対立は徒に混乱を増し、結局のところ、用語の概念を曖昧にし、理論の形式化の不徹底を招いているのである。そのために、殊にこの第四章は誤解を招きがちであった。しかし、本章に展開される考察は実の所極めて実り多いものを持っているのであり、用語の再定義と、理論体系の形式化の徹底という再構築に値するのである。これに関しては今年度六月に発行予定のLutèce22号（大阪市立大学フランス文学会発行）に論文を立てて述べる予定である。

- 13) 武勲詩のフォルミュールに着目したのは、Italo Siciliano であるが、Rychner 以降も研究は続けられ近年にも、その成果が発表されている。Cf. *Le Origini delle Canzoni di Gesta, Teorie e Discussioni*, (Padova, 1940) [*Les Origines des Chansons de Geste, Théories et Discussion*, (traduction française par P. Antonrtti, A.-J. Picard, Paris 1951) *The Song of Roland— A Generative Study of the Formulaic Language in the Sigle Combat* (Genette Ashby-Beach, Rodopi, Amsterdam, 1985)]
- 尚、以下に名のでるMilman Parryとフォルミュールの関係（また、既出のMathias Murko）については、「《口承詩》理論と武勲詩研究（1）」（神沢栄三、名古屋大学文学部研究論集）を参照されたい。
- 14) 『ロラン』がRychner の言う様に《文学的》と言えるかどうかは、甚だ疑問と言わざるを得ない。確かに『ロラン』を武勲詩の典型例とすることは危険であるが、それはどの武勲詩作品にも言えることであろう。『ロラン』が形式上例外的であるにせよ、そうした形式が《文学性》に関与的であるか否かは別問題である。このように形式的な分析から引き出された諸帰結の解釈には様々の危険が付きまとう。例えば、Rychner は第一章の冒頭部分 (p.9) で既に、「社会の発展の度合いが低い程、文芸は一層何らかの諸条件に縛りつけられる〈appliqué〉ことになる」としている。しかし、近現代の作家が、自らの作品の刊行の諸条件によって、形式上の変更を余儀なくされる例は少なくない。例えば、第一次世界大戦による刊行の中断がブルーストの「失われた時を求めて」の形式にいかなる変化をもたらしているかを、Genette は「物語のディスクール」の随所で語っている。この場合、ある時代特有のジャンルの形式上の拘束の多寡を判断し得る程に、Rychner の研究が広範な表現形式を網羅しているかどうかということ以上に、あるジャンルに固有の形式が持つ拘束力の強弱がそうも容易く測定され得るかどうかが問題となる。Cf. *Discours du Récit* (Gérard Genette, *Figure III* (pp.65-273))
- [邦訳：「物語のディスクール」(花輪光、和泉涼一訳、水声社、1985)]
- 尚、『ロラン』を「傑作」視する従来の諸批評に対しての反論も生まれつつある。Cf. *La Geste de Roland*, 2 vol (Robert Lafont, L'Harmattan, Paris, 1991) [\*尚、本章の小見出しは本稿筆者によるものである]
- 15) 普通選挙と類似の集団的な決定が、武勲詩の練成に寄与したという意味での「民衆による彫琢」を認める点では、Rychner はPidal と軌を一にする。Cf. Menéndez-Pidal, op. cit. pp.451-517